

外来通院で抗がん剤治療

やまなし

医療最前線

県立中央病院から

末期がん患者の延命治療のイメージが強かった抗がん剤治療は、今や「治すための治療」。県立中央病院は4年前から外来通院での抗がん剤投与を開始し、「日常生活を送りながら治したい」という患者の要望に応じている。

同病院化学療法科の飯野昌樹科長によると、抗がん剤などの化学療法は、がんを手術前にできるだけ小さくし切除する部分を少なくする場合や、手術後の再発予防のために用いられることが多くなってきた。

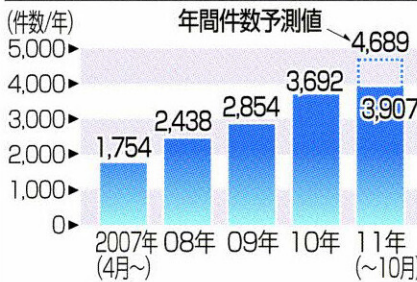


飯野 昌樹
化学療法科長

日常生活を送りながら

《 8 》

山梨県立中央病院の外来化学療法施行件数



外来通院での化学療法が国内で広がり始めたのは2002年ごろ。その後「地域がん診療連携拠点病院」の指定要件に外来化学療法室の設置が盛り込まれたことを背景に、ここ3～4年で急速に拡大した。吐き気や感染症など、抗がん剤による副作用を予防・抑制する薬や、自宅で持続的に点滴投与できる携帯器具の開発など「支持療法」が進歩したこと、がん告知の一般化が後押ししている。

は2438人、09年2854人、10年6月に20床の外来化学療法室を整備し、外来通院治療の受け入れを本格化すると、同年には3692人に拡大した。11年は10月末現在で3907人と既に前年の受け入れ数を超え、約4千人に達する見込みだ。

化学療法を受ける患者の多くは、可能な限り日常生活を送りながら治療を受けたいと望むことから、今では化学療法を受ける患者の外来・入院の割合は7対3と圧倒的に外来が多い。

外来化学療法室での治療は1回3～4時間程度。疾患にもよるが、手術前後の約半年の間に1～2週に1回程度通院して受ける。飯野科長は「外来通院での化学療法を受ける患者さんの不安の一つに副作用がある。遠方から通院する患者さんに対しては、副作用が出たときにわざわざ県立中央病院に来なくてもいいように、地域の診療所と連携する体制を整えていきたい」と話している。

(第2、第4金曜日に掲載) ます。次回は12月9日です)